

九州方言音声の諸相¹

Aspects of phonetic features in Kyushu dialect

杉村 孝夫

Takao SUGIMURA

国語教育講座

(平成21年9月30日受理)

キーワード：九州方言，琉球方言，中舌母音，軟口蓋鼻音，前鼻音，四つ仮名，イントネーション

(1) 九州方言

九州方言は、九州本島と鹿児島県の奄美を除くトカラ列島から壱岐・対馬までの諸島に行なわれる方言を指す。

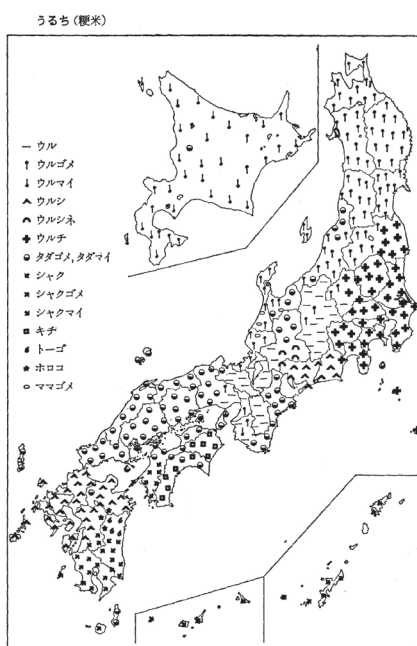
(2) 九州方言と琉球方言

日本の方言区画はまず、本土方言と琉球方言の2大方言に分かれるが、九州方言と琉球方言との関連性は早くから指摘されてきた。²『日本語地図』などの分布を見ても、九州方言の、特に南部は琉球方言との連続性があることがわかる。

例えば、サクマイ（うるち米）、ヤキモノ（瀬戸物）、コシヨー（唐辛子）などの分布を見てみる。

「うるち（粳米）」の地図では、宮崎・鹿児島県から沖縄県にかけて「シャク、シャクゴメ、シャクマイ」という「シャク類」が分布している。この類は日本の他の地域には見当たらない。

図1



¹ 本稿は、日本音声学会2009年全国大会(九州大学箱崎キャンパス2009.9.26)における特別講演をまとめたものである。当日、会場や懇親会で貴重なご意見を多数賜りました。記して感謝申し上げます。

² 柳田国男『海南小記』(例えば『定本柳田国男集』第1巻p.269「今の正しい首里語なるものに耳を傾けると、律儀な九州辺の武士に対するやうな感じがする。」、伊波普猷『南島方言史攷』(伊波普猷全集第二巻p.33「琉球開闢のアマミキヨの名は琉球人の祖先が九州から来て奄美大島を経て琉球に渡ったことを証明する手がかりになると思ふ。」p.34「琉球人の祖先が九州にゐるといふことを証明する面白い言葉がある。琉球語でユームといふ言葉は口の尖った人にいふことであるが、これは薩摩の方言のヨモと同語根の語で猿といふことである。)), 秋山正次「南島方言の断定陳述—その九州方言との類似について—」(『肥後の方言』1979 桜楓社 pp.104-118)

「せともの(瀬戸物)」の地図では、「ヤキモノ類」が、これは全国に点々とあるが、まとまった分布としては宮崎県南部から鹿児島県、沖縄県にかけて「ヤキモノ、ヤキムヌ、ヤチムンなど」という語形が分布している。

「唐辛子」を福岡県では「コシヨ-」と言う。唐辛子と胡椒を区別して言う時には、唐辛子は「コシヨ-」、胡椒は西洋の洋をつけて「洋ゴシヨ-」のように区別する。この「コシヨ-、コ(-)シュ(-)、クース、コーレーグース」類が九州から沖縄にかけて分布する。但し、コシヨ-は出雲や中部地方などにも分布するので「圏分布」と言えるであろう。³

語詞の分布の連続性を示すものとして、最後に『現代日本語方言大辞典』から作図した「よもぎ(蓬)」を取り上げる。分布図では「フツ系」としてまとめた「フツ、フトウ、フツ、フチュ[ɸutsi]、フチ、フチバー」などが九州のほとんどと、宮古諸島を除く奄美・沖縄に分布している。⁴

図2

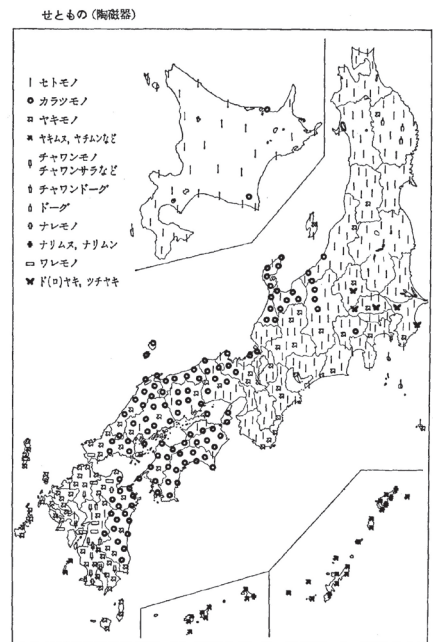


図3

(2.1) 表現に関して九州と琉球の連続性を取り上げたものとしては、「南島方言においては、九州方言と同様、またそれ以上に終結断定表現を避けこれを零記号にしたり、余情的な表現にしたりする傾向を持っている(秋山正次 1979: 116)。」という指摘がある。

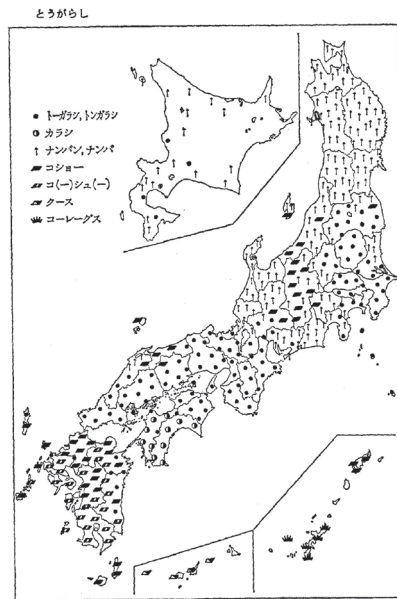
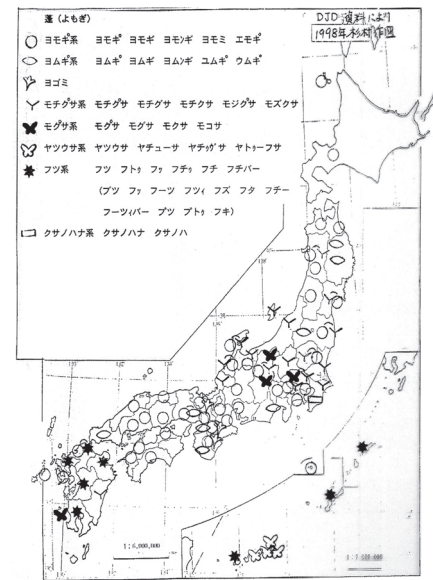


図4



例えば、「黄色い花は菜種で、白いのは大根だ。」という文は、熊本と首里では次のように言う。

熊本：キンナカツァー ナンハナジ, シロカツァー ダイコンダガ。(ダイコン□タイ。)

(~ダルガ。~ダルモン。~ダモン等ともなる)

首里：チールーバナヤ ナーヤて シルーヤ デークニヤサ

チールーパナー ナー□ シルーヤ デークニ□。(伊波氏訂正文)

(秋山 1979: 106-111)

断定辞に当たるところが現れない。秋山(1979)の表記では零記号として白い四角, □で表わされている。

³ 徳川宗賢編 1979

⁴ 平山輝男他編 1992-1994

九州方言学会の広域調査でも「肥筑には指定助動詞のいいきりの用法に立つ助動詞はない。⁵⁾」ということが明らかにされた。

(2.2) アクセントの分布では、西南部九州のアクセントは「語声調」であり、琉球方言につながるという捉え方が早田輝洋(1977)で発表された。⁶⁾「日本およびその周辺のアクセント分布」という図は非常に衝撃的であった。九州西南部から奄美・沖縄にかけて分布する「語声調」のアクセントが朝鮮半島南部や大陸の中国にも分布している。日本の方言だけを見ていたのではアクセントはとらえきれないということを反省させられた。

九州から琉球にかけて同じ性質のアクセントが分布することを実証すべく、久留米大学の崎村弘文氏が九州と琉球のアクセントの調査を単独で踏破し、著書にまとめている。その中で首里方言と鹿児島市方言の複合語のアクセント法則がよく似ていることも明らかにされた。⁷⁾

図5

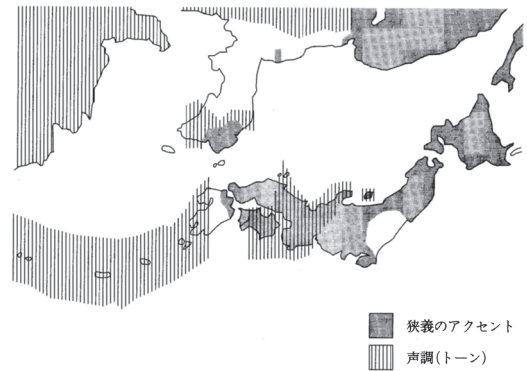


図5 日本およびその周辺のアクセント分布

(2.3) さらに、柴田武(2002)の次のような指摘もある。「宮崎県を一部含んで鹿児島県・沖縄県の人々の発話を聞いてみると、特に録音されたものに耳を傾けると、発音に強い呼気の伴うことに気づく⁸⁾」。九州南部の鹿児島県は、呼気が強い。また、八重山波照間方言では広い母音や鼻音までも無声化して、例えば「花」[paŋa]では、はじめの母音[a]と鼻音[n]が無声化して、有声音は最後の母音だけである。これも強い呼気のために広い母音や鼻音までも無声化したものである。

(3) 九州方言の区画

九州方言と言っても、もちろん一色ではない。九州方言研究会編『これが九州方言の底力!』の中で加藤正信(2009)は次のように書いている。⁹⁾

東北方面は、大きく北部や日本海側と、南部の太平洋側に分かれますが、一般に、同じような方言が東関東を含めて広大な原野に広まっています。一方、九州は、多くの離島はもちろん、福岡県など北部、瀬戸内海に面した東部、九州的色彩の濃厚な中部・西部、鹿児島県を中心とした独特な南部に大別され、さらに、細かい地域差が、旧藩ごと、谷ごとに刻まれています。それは単に、地形、行政だけでは説明できない歴史、文化が染み込んで現在の九州各地の方言が形成され、自己を主張しているようにも見えます。

九州方言絶賛のこの本の性質からして少し割引して読まなければならないかもしれないが、九州方言の多様性がよくわかるのではないだろうか。

九州方言は、豊日(ほうにち)、肥筑(ひちく)、薩隅(さつぐう)の三方言に分かれるという説が有力である。¹⁰⁾

- ・豊日方言は福岡県の豊前地区、大分県の豊前・豊後、宮崎県(日向)の大部分。
- ・肥筑方言は佐賀・長崎(肥前)と熊本(肥後)及び福岡県の筑前・筑後。

⁵⁾ 九州方言学会 1969: 188 要約

⁶⁾ 早田輝洋 1977 及び 1999 に再録。

⁷⁾ 崎村弘文 2006: 426-443 「沖縄首里方言における複合名詞音調規則について」で『沖縄語辞典』の複合名詞 435 例について調査した。①型語 83%, ②型語 92% が語頭の音調に一致する。

⁸⁾ 柴田武 2002: 133-135

⁹⁾ 九州方言研究会編 2009: 144-147 「孫に菓子を『くれる』—東北方言と九州方言」大修館書店

¹⁰⁾ 上村孝二 1983: 7-8。豊前と豊後の方言は四国の愛媛南部の方言と共通するところもある。奥村三雄(1958)。金田一春彦(1964)は外輪方言に属する九州一般から切り離して中国地方などと同じ中輪方言に入れた(『日本の方言区画』。同: 4-7)

・薩隅方言は旧島津領の大部分で、鹿児島県と宮崎県の諸県地方も含む。

(4) 九州方言の音声の諸相を知るための主な文献は次のとおり。

平山輝男 1951『九州方言音調の研究』

金田一春彦 1954「音韻」(『日本方言学』)

国立国語研究所 1959『日本方言の記述的研究』

国立国語研究所 1966-74『日本言語地図』

九州方言学会 1969『九州方言の基礎的研究』

上村孝二 1983「九州方言の概説」(飯豊毅一他篇『講座方言学—九州地方の方言』p.8-16)

上野善道編 1989「音韻総覧」(『日本方言大辞典 下巻』p.1-77)

九州方言研究会 1996『九州方言研究会報告書』

(4.1) 『日本言語地図』の音声関係の分布図には次のものがある。

地図 1, 2 では語中のガ行音, 地図 3, 4 ではカ, ガの合拗音, 地図 7, 8, 9, 10 はセ, ゼの口蓋化, 地図 11 ~ 14 ではヒトシの音声, 地図 15 は語中のジの音声, 地図 16 はチの音声の分布を描いている。この中では後でガ行音, セ・ゼの口蓋化を取り上げる。

(4.2) 『九州方言の基礎的研究』では, 広域調査項目として音韻関係 60 項目を設定 (p.6-9), 調査結果は「音韻一覧表」として 28 項目 (p.23-66), 「音韻分布図」として 13 項目 (p.137-152) が示されている。このほか「分布略説」として 59 項目の分布が解説されている (p.184-186)。アクセントは 50 の調査項目が示されているが (p.14-15), 調査結果は一覧にも図にも略説にもない。¹¹

音韻・アクセントの記述は各県別解説と集中調査研究 (4 地点) にもある。

(5) ここから九州方言の音声について具体的にいくつかの項目を取り上げていく。

取り上げる項目は以下のとおり。

1. 中舌母音
2. オ列長音の開合
3. ガ行音
4. 破裂音の前鼻音
5. カ行音の有声化
6. 前鼻音と有声化
7. 唇音化
8. エ段音の口蓋化
9. 四つ仮名
10. イントネーション

(5.1) 中舌母音 [ɛ̃][i]

中舌母音といえば東北地方や出雲が有名であるが, 九州地方にも中舌母音があることは案外知られていないのではないだろうか。トカラ列島の子宝・宝島や宮崎県高千穂町などには中舌母音があることが報告されている。¹²

高千穂町の例では [am̃e:] (甘い) [os̃e: ~ osi:] (遅い) [mi:ta] (向いた) で, これらは共通語の ai, oi, ui に対応する。

周辺部では [am̃e:][os̃wi:][m̃wita] のように [w] 音であらわれ, これが中舌音となったものと解釈されてい

¹¹ 未発表のものも含めて分布図を青焼きにしたものが熊本大学, 大分大学, 別府大学に有り, 公開の準備が進められている。

¹² 上村孝二 1983: 8

る。¹³

NHKの『全国方言資料』では、宮崎県西臼杵郡五箇瀬町¹⁴桑内野方言の、共通語で ai, oi, ui に対応するところに現れる母音を前舌半狭円唇母音で記述している。¹⁵

高千穂町押方では [oi][ui] > 中舌狭母音、西臼杵では [ai] > [u] と [e] の中間音という記述も見られる。¹⁶

口頭発表ではあるが、日高貢一郎氏が日本方言研究会第19回研究会で発表した発表原稿集に宮崎県西臼杵郡の中舌母音について具体的に記述したものがあつた。宮崎県の中舌母音に関しては、これが最も詳しいと思う。¹⁷

五ヶ瀬町大字桑野内字麦の崎方言の記述は次のとおりである。

まず、oi・ui の融合した音についていうと、

唇は非円唇で、唇が両脇に引かれるのが観察される。口の開きはこの方言の [i] とほぼ同じである。舌の位置については外からは十分に観察できないが、話者の発音を日高がまねをし、それを話者に判断してもらうという方法で調べると、舌は奥に引かれ、明らかに中舌的である。本来の [i] とは調音方法、聴覚印象とも明らかにちがっている。話者の内省によれば、「イとウの中間の音」という。音声的には中舌の [ɨ] のようなひびきも伴って聞こえるが、私はこの音を [i:] と表記することにしたい。

一方 ai の融合した音はというと、

唇は同じく非円唇で、i と同様、唇が横に引かれるのが観察される。口の開きはこの方言の [e] とほぼ同じである。舌はぐっと奥に引かれ、後舌部がやや上に盛り上がる。本来の [e] とは調音方法、聴覚印象とも明らかにちがっている。話者の内省によれば、「エともウともつかん音」という。音声的には、かなり奥寄りの暗い感じの音で、中舌の [ɨ] 的なひびきも聞こえるが、e のひびきが強く聞かれるので、私はこの音を [ɛ:] と表記することにする（日高 1974:14）。

[i:] と [ɛ:] の音韻論的解釈については

[kuri:] <黒い> [nuri:] <ぬるい>

[kuri:] <くれる> [nuri:] <濡れる>

のミニマルペアーがあることから /i/ と /i:/ という2つの音素が立ち、

[takɛ:] <高い> [nɛ:] <無い> についてはミニマルペアーは無いが、

[hae:] <早い> [e:ta] <焼いた> のような例があり、/i/ とのバランスから /e/ と /ɛ/ は別の音素とする。また、この /e/ と /ɛ/ がほとんどの子音と結合することも両音素を立てることを支持するとしている（日高 1974:15）。

日高（1974）は西臼杵郡の音声の実態の報告に止まらず、次のような重要な指摘を行なっている（抄録）。

連母音に由来する中舌の ɛ は、西臼杵郡の他にトカラ列島の宝島、子宝島にも有る。そのほか天草の深水（ふかみ）、奄美大島、徳之島、喜界島と八重山の波照間島にも有る。

一方、日本全体を見渡せば、中舌母音は東北、能登、出雲にあるが、いずれも短母音、すなわち共通語のイ・ウに対応するものである。

日高（1974）は、中舌の「ɛ は連母音に由来、九州以南の方言にしか聞かれない」（p.19）と指摘する。これは先述の語の分布、表現、アクセントなどにおける九州と琉球との連続性指摘に対する追加というべきものである。さらに次のような指摘が続く。「九州・琉球両方言の『基質』とでもいうべきものがかなり近い関係にあることを思わせ、興味深いものがある。」（日高 1974:19-20）

崎村・木部（2009:183）にも同様の指摘がある。

東シナ海沿岸地域には古くから人々の交流があり、ことばの面でもお互いに影響し合い、刺激しあってきたと思

¹³ 上村孝二 1983:8-9

¹⁴ 1967年当時の表記。現在は「五ヶ瀬」と表記。

¹⁵ NHK 1967, カセット版 1981:22

¹⁶ 岩本実 1983:276。岩本実 1964:18 では ai との対応は weR (nagweR 長い, kweRko 蚕など) としている。

¹⁷ 日高貢一郎 1974:8-21

われます。「語声調」という共通の特徴も、弥生時代初めごろの、中国を起点とする人々の交流が、この地域にもたらしたのではないかと考えることができます。まだ解明すべき点は少なくありませんが、九州方言と琉球方言の共通点を探る試みは、海を越えて異文化と積極的に交流した、古代の人々の営みへと、想像を誘うものでもあります。

NHKの全国方言資料は具体音声聞くことができる。

「五箇瀬町桑野内（宮崎県）自由会話1 地震と台風の話」

音声表記があるものは脚注で表記のあるもの。音声表記の無いものは脚注が無いものであるが、「音韻おぼえがき」(p.247)に「アイ・オイ・ウイがくちびるの調音を伴う単母音 ([ϕ (:)], [wa(:)]) になっている。」にしたがって取り上げた。

ai> ϕ : の例

コモエーモン [kom ϕ :-] (p.249, 3段)

アゴエナー (あんなふう) (p.249, 10段)

ナンノジャノエ (なんのじゃない) (p.250, 5段)

イッポモ ナエ (1本も ない) (p.251, 6段)

oi> ϕ : の例

ツェードガノ [ts ϕ :-] (強いでしょうね) (p.251, 3段)

ui> ϕ : の例

キリクゾエタラ (切りくずしたら) (p.251, 6段)

NHKでは「くちびるの調音を伴う」とあり、日高(1974)の観察では「非円唇」「唇が横に引かれる」とあり、食い違っている。地域も話者も年代も異なるので同じ発音を聞いて表記が異なるわけではない。録音は1950年頃で音質もかなり劣化しており、十分聞き取れないが、聞いた限りでは円唇性は無いようだ。実際に臨地して確かめなければなんともいえないが、日高(1974)の話者は1906(明治39)、1908(明治41)年生まれで、それぞれご存命なら100歳、98歳である。NHKの話者の生年はそれ以前であるから、直接ご本人には確かめようもないであろう。

(5.2) 「オ列長音の開合」に対応する音声

これは、室町末期の京都語の開合に対応するもので、現在の九州方言では(むろん高齢層で)開音は[o:]と発音され、合音は[u:]と発音される。

[au]に由来する開音は[o:] 例えば[to:ɕi] (湯治)

[ou]に由来する合音は[u:] 例えば[ϕ u:ɕuki] (ほおずき)

[eu]は[iu]を経て[ju:]となる。例えば[kju:] (今日)

「ふうずき」と、実際に文字で書かれることもある。次の写真は、今から13年ほど前に佐賀県の三瀬村の売店で撮影したものである。



(5.3) ガ行音

図 6

(5.3.1) ガ行音には、次の3つのバリエーションがある。軟口蓋破裂音・軟口蓋鼻音・前鼻音のある軟口蓋破裂音 [ga・ŋa・ʔga] である。

軟口蓋鼻音の聞かれる地域は、薩摩半島南端、鹿児島県阿久根市の一部、長崎県野母半島南部、島嶼部では対馬・壱岐・上五島有川町・上甕島・屋久島で、種子島は、北部は [ŋ] だが、他の地域は [ŋ] から [g] になっている。¹⁸ 各地点の位置を齋藤 (2002) に記号を加筆した下記地図上に記した。

具体例は対馬・壱岐の [tɕu:ŋaku] (中学)。

また、薩摩半島南端の例として枕崎市の鼻音の例を久野マリ子他 (1991) から引用する。

[sanziŋi iganna sumanŋa] (三時に行かなければならない)

[sumanŋa] (ならない) のガ行が鼻音で発音されている。¹⁹

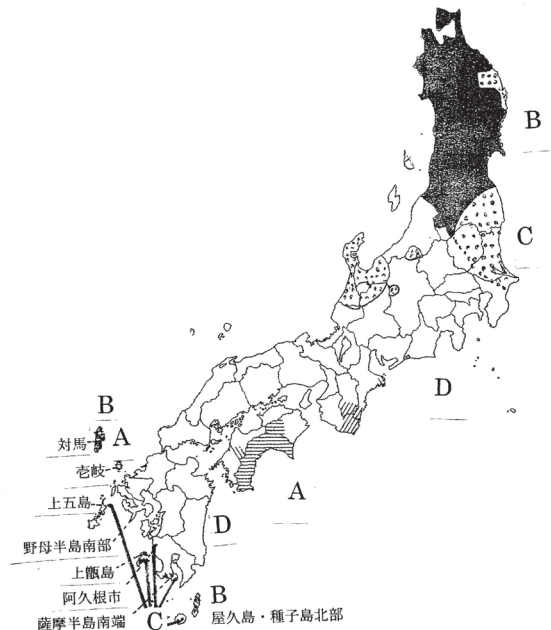


図 2.6 語中子音鼻音化・有声化現象
凡例 ■: ザ・ダ・バ行の鼻音化+カ・タ行の音声化, ▨: ザ・ダ行の鼻音化, ▩: ダ・バ行の鼻音化, ▪: ダ行の鼻音化, □: 鼻音化・有声化なし, ▧: カ・タ行の有声化。上野ら (1989), 平山ら (1992) をもとに、齋藤 (1987, 1990, 1991, 1992a, 1992b, 1992c, 1993, 2001d, 2001f) を参照しつつ、総合し齋藤作図。

(5.4) 破裂音の前鼻音

ガ行音で破裂音の前鼻音が聞かれる地域は、対馬・壱岐・種子島である。例えば [mu`gi] (麦) 対馬・壱岐ではガ行以外にもダ行音で破裂音の前鼻音が聞かれる。例えば, [ɕu`de] (筆), [i`do] (井戸), [ta`da] (ただ)

また、種子島では、母音の間の b・m・d に高齢者では鼻音が聞かれた。

[ɕe`mi ~ ɕe`bi] (蟬), [ma`do] (窓)

「これらは古い音声の保存だったが、ほぼ消滅した。²⁰」という。

(5.5) カ行音の有声化

カ行音の有声化は東北方言がよく知られているが、薩摩半島南端などでも聞かれる。例えば、枕崎市では、ヨガ [joga] (良い) ナガ [naga] (無い) のように形容詞のカ語尾も有声音となる。久野マリ子他 (1991) から「杯」の音声引用する。

サガツッ [sagaɕut] (杯)

サガツゲ ヒッチハゲダ [sagaɕugu ɕittɕifageda] (杯を落とした)

サガツギ チガンカ [sagaɕugi ɕiganka] (杯に注がないか)

「さかずき」の「カ」の音が「ガ」と発音されている。

その他有声化した例は多くある。

[nogonɕut] (のこくず)

¹⁸ 上村孝二 1983: 11, 岡野信子 1983: 152, 瀬戸口修 1983: 334, 上村幸雄 1959, 植村雄太郎 2001: 概説 5

¹⁹ なお、後で取り上げるカ行の有声化が [iganna] (行かなければならない) の「行く」の「く」で起きている。

²⁰ 植村雄太郎 2001: 8

[aɔɸuɡu nida] (小豆をゆでた) タの有声化も
[ɔɸuɡin] (頭巾)

ここで、ガ行子音の前鼻音、「ザ行・ダ行・バ行の入りわり」について全国的な分布を「音韻総覧」で確かめよう。

図7

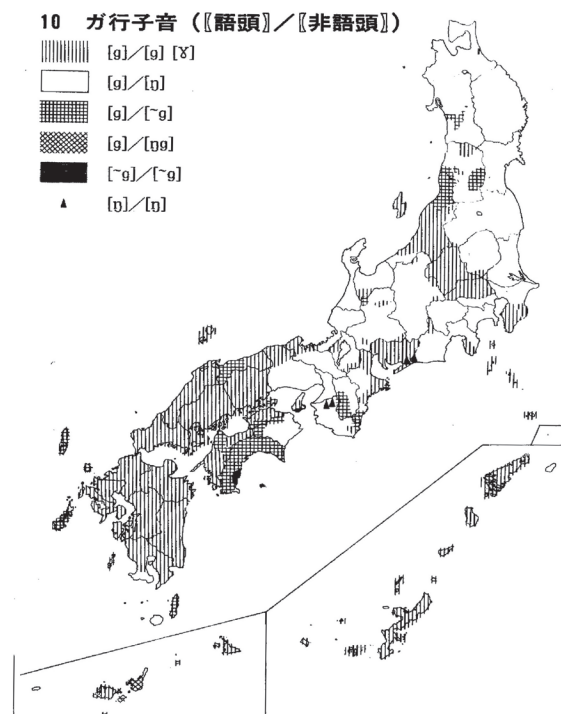
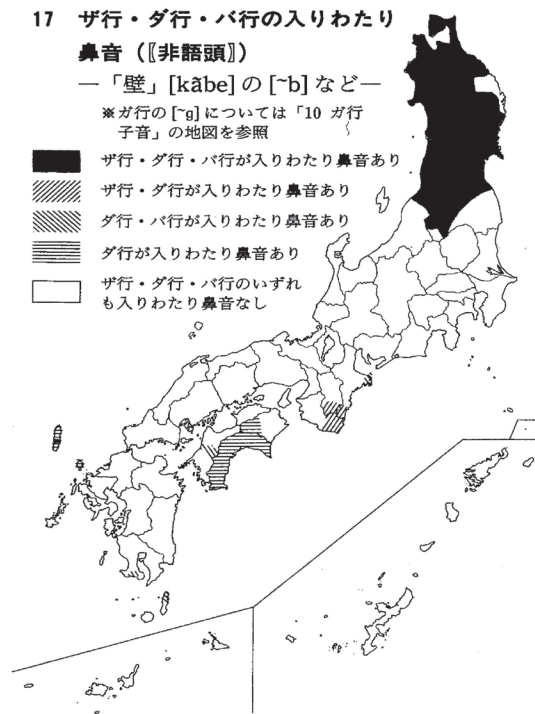


図8



これらをあわせて語中の前鼻音と有声化について分類し、分布と歴史的な変化について考察したのが齋藤孝滋 (2002) である²¹。先に挙げた図6参照。

齋藤孝滋 (2002) はこれら2つの事象について次の4つの方言に分類する。

- A 鼻音化のみある方言 (四国・紀伊半島南部・対馬・壱岐・種子島)
- B 鼻音化と有声化の両方ある方言 (東北地方)
- C 有声化のみある方言 (東北地方の一部・北陸地方)
- D 鼻音化も有声化も無い方言 (共通語など)

Aパターンは「中世までの中央語のパターンとほぼ同様で、有声化の発生条件である鼻音化は保持しているものの、有声化が生じなかったものである。」(齋藤2002:35) Bパターンは、Aパターンに有声化が起きたもの、CパターンはAパターンからBパターンを経て「鼻音化が消滅」したために生じた新しいパターン。Dパターンは「Aパターンの後、『鼻音化が消滅』したために生じたパターンであると考えられる

²¹ 齋藤 (2002) では、破裂音の前鼻音を「鼻音化」と表現しているので、引用の場合はこの用語に従う。

のである。」(齋藤 2002: 35-36)

前鼻音と有声化について、九州と九州以外の地方を分けて整理すれば次のようになる。

九州	前鼻音	九州以外
対馬・壱岐	ダ行	高知
対馬・壱岐・五島・種子島	ガ行	高知
種子島	ダ・バ行	愛媛
	ザ・ダ行	奈良・和歌山
	有声化	
屋久島・種子島	カ・タ行	北陸・栃木・茨城
対馬・上五島・上甕島		福島県東部
阿久根市・薩摩半島南端		波照間・与那国
	入りわたり鼻音+有声化	
	ザ・ダ・バ行+カ・タ行	東北

これに九州各地の方言をパターン化すると、壱岐はガ行・ダ行の前鼻音のみある A パターン。対馬・種子島はガ行・ダ行の「鼻音化」とカ行タ行の有声化がある B パターンの方言。上五島、上甕島、阿久根市、薩摩半島南端、屋久島はカ行・タ行の有声化のみの C パターンの方言になる。齋藤 (2002) の図に ABCD の記号を加えたのが前掲の図 6 である。

九州では A パターンから B・C パターンまでが北・西・南の周辺部に散在し、D パターンが本島の大部分を占める。

(5.6) 唇音化

17 世紀、博多で合拗音の唇音化が起きていることがロドリゲスによって記述された。²²

博多のものは、一種の非常な訛りがあって、よく知られてゐる。

流音の Qua, Gua をすべて Pa, Ba に変へ、Pa をすべて Qua に変へるからである。例えば, Quabun (過分) Quansu (罐子), Quannen (観念), Quaxi (菓子), Quaxibon (菓子盆) などを Pabun, Pansu, Pannen, Paxi, Paxibon などといひ、

19 世紀、対馬の『日暮芥草』²³ にも次の記述がある。

「パセル」(食わせる)

現在の方言では天草、薩摩半島南端で kw>p の変化が残存する。

例：枕崎市 パス [pasu] (菓子を)

柴田 (2002) は琉球方言の唇音化現象 [w>b] との関連を指摘した (柴田 2002:133)。さらに『日本言語地図』の次のような分布があることも指摘した。

LAJ 5 巻 249 図「とげ (刺)」に pii が鹿児島・熊本に 2 地点有る。

同 250 図「とげ (棘)」に pii が宮崎西南部～鹿児島に 11 地点有る。

「音韻総覧」「クエ」の項 (p.22) では [pe:] (食え) が対馬、天草、鹿児島県西部 (串木野市ほか)、薩摩半島南端部 (特に枕崎に顕著) とある。

『日本方言大辞典』(1989) の「ぴ」の項目 (p.1975) には、大分県別府市「とげをもった低木類。茨 (いばら)。」鹿児島県、大隅地方「とげ」とある。「杭」の意味のピーは kui>*kwi>*kbi>pii の変化をたどった

²² Rodríguez1604 『日本大文典』 p.610-611

²³ 文化 10 (1813) 年成立

と推定されている。

天草で [kwan][pan] (食わない) [kwe:][pe:] (食べ) [ci:pa] (西瓜) (秋山 1979:17) とも。

天草の牛深で [ci:pa: pe:] (西瓜を食べ)

これは, suikwa kue> ci:pa: pe: のような変化をたどって生じる。

また, 天草では「ピー」は「細長い棒」の意であるという。「杭」との関連があろう。

種子島では [kwi:] ~ [pi:] (とげ) (植村雄太朗 2001 『種子島方言辞典』 p.5-6)

(5.7) エ段子音の口蓋化

九州ではセ・ゼをシェ・ジェで発音することがよく知られているが, サ行・ザ行のエ段音のみならず, 次のようにア行・タ行・ナ行でも口蓋化は起きる。大分県・宮崎県など特に盛んである。

je [jempitsu] (鉛筆) [tsuje] (杖)

ce [cemi] (蟬) [ace] (汗)

ze [ze:kiN] (税金) [kaze] (風)

tce [tce] (手) [kitce] (来て)

ɕe [uɕe] (腕)

ne [anesaN] (姉さん)

(5.7.1) 在来方言でシェ・ジェと発音することに対するハイパーコレクションとして「ゼイアール・ゼットコースター・プロジェクト」などといった発音を中年の男女から聞くことがある。大学の教授会や委員会のような公の場面でも中年男性から聞かれる。

(5.8) 四つ仮名 (ジ・ヂ・ズ・ヅ)

従来「四つ仮名」の区別のある地方は, 佐賀県・福岡県の筑後・大分県西部の日田・玖珠地方・南部の大野郡・南海部郡・日向の中南部以南・薩摩半島といわれている。

しかし, 岡野信子 (1988) によると, 筑後の浮羽郡田主丸では 1958 年頃老年が [mandu:] が [manzu:] になったと嘆いていたという。²⁴ 饅頭の「ヂュ」の発音が「ジュ」と区別が無くなってしまったと嘆いたというのである。岡野 (1988) では, 八女市の一識者は四つ仮名を使い分けると自覚していたが実際の音声にはほとんど差がなかったという。

一方, 筆者が聞いたことのあるのは次の地点である。大分県日田近郊で 1977 年頃前老年層が区別するのを聞いた。宮崎市近郊で 1975 年頃老年層から聞いた。後者は, 今では衰退したという。鹿児島県の額娃町 (1996), 岡見ヶ水 (1994) や枕崎 (1990) では老年層が区別するのを聞いた。枕崎では 70 代はしっかり区別していたが 60 代では歴史的仮名遣いとの対応の「乱れ」も見られた。枕崎の四つ仮名の音声を久野マリ子他 (1991) から引用する。

語中

富士 ɸuzi

藤 ɸuɕi

火事 kwas ・・・/zi/ に対応

火事を消した kwazu keda

火事になった kwazi natta

舵 kat ・・・/di/ に対応

舵を取った kaɕu totta

舵に触るな kaɕi kaganna

語頭

²⁴ 岡野信子 (1988 : 252)

生地	ɰi
字	zi
字を書いた	zio keda
痔	ɰi
痔を切った	ɰio kitta

(5.8.1) 筑後や佐賀県では四つ仮名に対応する [zi][zu][ɰu] が [ci][su][tsu] に変化する現象がある。四つ仮名の「ジ」「ツ」に対応する音が無声子音の前で無声化して「シ」「ツ」となり、かつての四つ仮名の対立を反映した形で残しているものである。例えば、

[kuɰihan] (九時半)
 [esuka] (えずかー恐い)
 [kotsukai] (小遣い)
 のようである。

(5.9) イントネーション

熊本市・宮崎県宮崎郡清武町・福岡県大牟田市（無型アクセント）・鹿児島県国分市・開聞町（語声調アクセント）・福岡県宮若市・福岡市（多型アクセント）などのイントネーションを検討したところ、文のイントネーションを決定する要因は次の6つの要因で記述できることがわかった。

a 語アクセント b 句音調 c 文の構造 d フォーカスの位置 e 文末助詞のアクセント f 文末のイントネーション

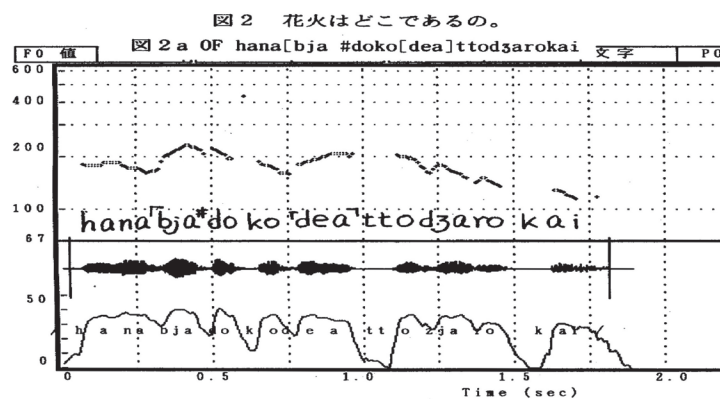
以下、各地のピッチ曲線を検討し、イントネーション生成の要因を考えてみたい。

「花火はどこであるの」「映画は何をやっているの」に相当する表現を各地方言に翻訳して発音した資料を比較する。²⁵

(5.9.1) 宮崎県宮崎郡清武町（無型アクセント）LH#LHL

hana[bja#doko[dea]ttodʒarokai

図9



²⁵ 吉岡泰夫 (1990) 作成の「文型イントネーション調査表」によった。清武町については、杉村 (1996) で疑問文を考察したが、ピッチのとらえ方、規則の立て方など不十分な点も多い。国分市（現在は合併して霧島市となった）は福岡教育大学玉乃井愛の卒業論文資料、開聞町（現指宿市）は同じく卒業生今福麻美の録音資料による。

第1アクセント句（音韻句）は句末上昇、第2アクセント句は2文節が一続きになって、LHLのピッチ変動を示す。この文のフォーカスは疑問詞「どこで」にあり、2つ目のピークを形成している。また、この文では、文末の助詞「カイ」が下降調のイントネーションを要求する助詞であるため第2アクセント句は、句全体としてLHLとなった。²⁶

図10

(5.9.2) 熊本市（無型アクセント）
LHL#LHL²⁷

hana[bi]wa#doko[de]tto[na]

第1アクセント句、第2アクセント句ともLHLであられる。同じ無型アクセントでもアクセント句のイントネーションのあらわれ方が異なる。

熊本市（30代男性）HL#LHL 文末上昇²⁸

ee]gawa#na[m]basijo]ru[to]

文は、「映画は何をしているの」で異なるが、題目を表す句で始まり、疑問詞のある句と述語が続く文であり、文型としては「花火は・・・」と同じである。30代男性の場合は、HL, LHLという句のイントネーションである。文末は質問意図を上昇調で表している。これは共通語のイントネーションを取り入れたもので、先の60代男性に見られたように疑問文であっても文末は下降するのが従来の姿である。

(5.9.3) 福岡県大牟田市（50代女性）（無型アクセント）HL#L 文末下降²⁹

e]ega#naNgaarijoru]N

第1アクセント句はHL、第2アクセント句はずっとLが続いて文末は下降する。文末助詞の「の>ん」は共通語を背景とした北九州市方面の影響を受けた新しいものであるが、

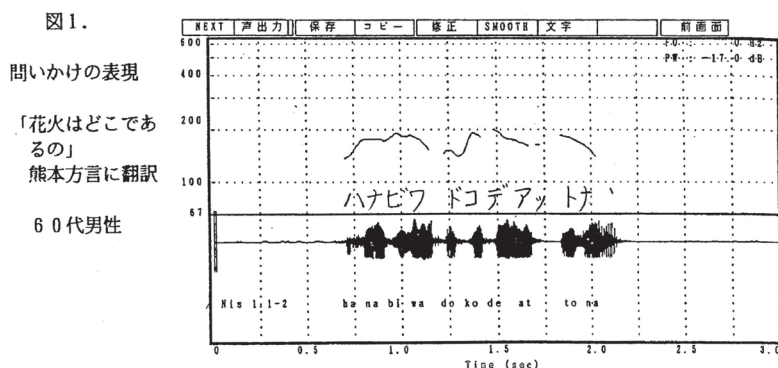


図11

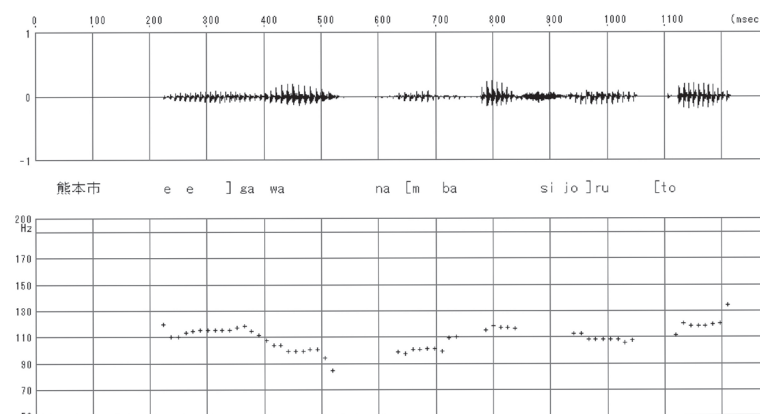
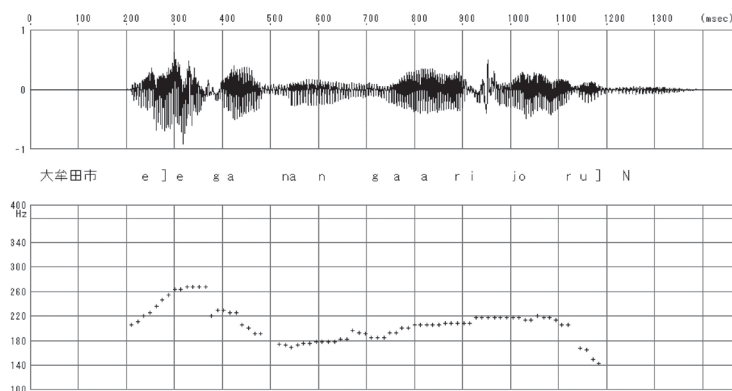


図12



²⁶ 宮崎市近郊の清武町は無型アクセントであるといわれているが、アクセント句末が上昇する句のイントネーションを持ち、「尾高一型」的である。

²⁷ 吉岡泰夫・都染直也（1991）

²⁸ 2009年8月発音していただいた。

²⁹ 注28に同じ。

下降する点は伝統方言の姿をとどめている。第2アクセント句のイントネーションは後述の福岡市のイントネーションに似る。

(5.9.4) 鹿児島県国分市（2型アクセント）B#B#Adokai

hanabi[wa#doko[de#ja?]oddo]kai

語のアクセントの種類は2つで、下降があるA型か、下降の無いB型かのいずれであるかが決まっている方言なので、単語のアクセントが何であるかによってアクセント句の上昇、下降の位置も決まる。東京方言のように文節（実は語彙・文法の役割を担った単語）が結合して長いアクセント句になることも無く、それぞれの文節ごとにひとまとまりのアクセント句を形成する。

「花火」「どこ」はB型、「やる」はA型である。

「花火は」はほとんど平板であるが少し上昇気味である。「どこで」は句末上昇。フォーカスが置かれてピッチのピークがあらわれる。振幅も最大になる。「やっているの」の意味の「ja?]oddo]kai」は下降調であらわられる。文末の助詞「kai」も下降調である。

「映画は何をやっているの」A#B#Aado]na

ee[ga]wa#nan[nu#ja?]oddo]na

「映画」はA型「何」はB型である。

「映画は」では末尾から2番目の音節がピークをなし、「nan[nu（何を）」は句末音節がピークとなる。最後の「ja?]oddo]na（やっているの）」は下降調で、文末助詞の「na」も下降する。

鹿児島県指宿市開聞町も国分市と同様である。

開聞町（2型アクセント）

B#B#Adoo

hanabi[wa#doko[de#ad]doo

開聞町（2型アクセント）

A#B#Aado

ee[ga]wa#naN[ju#si]oddo

図 13

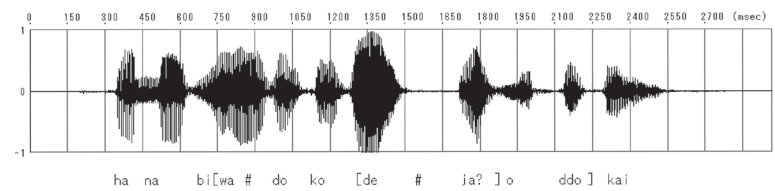


図 14

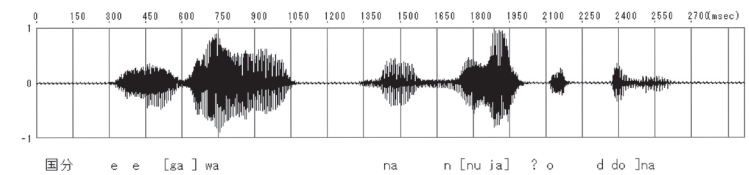
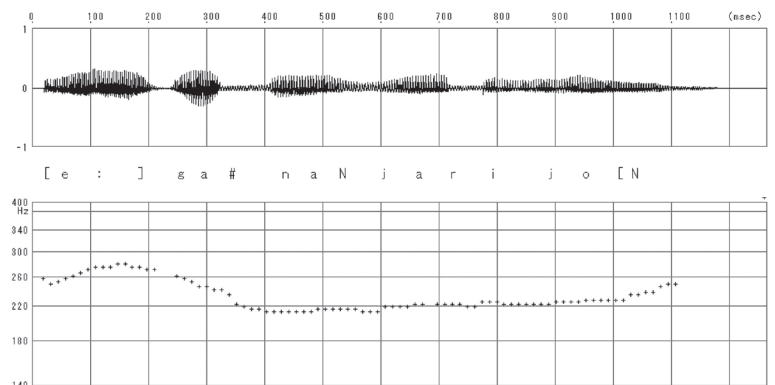


図 15



(5.9.5) 福岡県宮若市 (多型アクセント-筑前式)

①型#疑問詞の後核消去+文末上昇³⁰

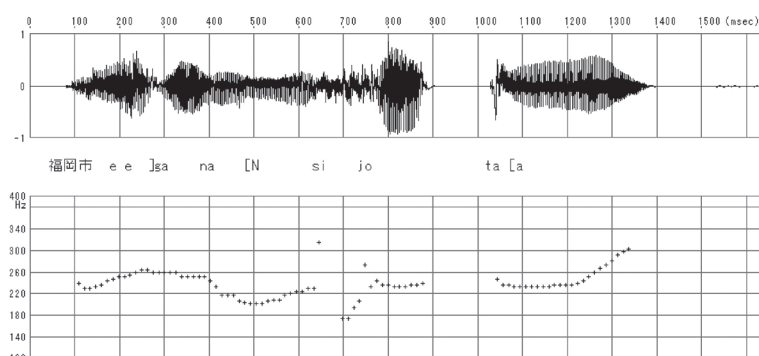
ee]ga#naN jarijo[N

宮若市 20 代女性の音声である。宮若市は福岡市の東北部に位置し、筑前式の多型アクセントである。「映画」, 「naN (何)」は①型, 動詞「jaru」も①型である。ところが疑問詞が文中では平板型で実現し、疑問詞以降のアクセント核は消去するという規則がある。³¹

よって「ee]ga」では下降があらわれ、「naN jarijo[N」では低く平らなピッチが続く。文末は質問を表す上昇のイントネーションがあらわれた。

福岡市の 50 代女性の音声 (図 16) でも³², ee]ga#na[Nsijotta[a のように, 「na[N」で上昇した後, そのまま高いピッチが続いている点, 宮若とは異なるが, 疑問詞に続く述語のアクセント核が消え, 平らなピッチが続いている。

図 16



(5.9.6) イントネーションの記述法

これまで見てきた無型アクセント, 2 型アクセント, 多型アクセントのイントネーションからイントネーションが実現するための要因をまとめると, イントネーションは先にあげた次の要因によって記述できることがわかる。

- a. 単語アクセント
- b. 句音調
- c. 文の構造
- d. Focus の位置
- e. 文末助詞のアクセント
- f. 文末イントネーション

「単語アクセント」はピッチの上昇や下降を決めるもっとも基本となるものである。単語のアクセントのほかに宮崎や熊本のイントネーションを見ると, 句末上昇とか, 句のどこかでピッチが上がり, 全体として LHL のタイプとなるなど句にも固有の音調があることがわかる。東京方言には句頭を下げるイントネーションがあることは早くから指摘されてきた。³³

³⁰ 2008 年の大学院の講義中に発音して分析した。

³¹ 早田輝洋 (1985), 久保智之 (1989, 2006) などによって報告された。例えば早田 (1985:26) では, 疑問詞から文末までどんなに長くても, また埋め込み文があっても, アクセントが消えるとして博多方言の次のような例をあげている。
イ [ツオマエコノマエオレノショーカイシタオンナトアッテデートシテコーチャノンドトヤ↑ (いつお前おれの紹介した女と会ってデートして紅茶飲んだんだ?)

Cf. オ [マエ] コ [ノマ] エオ [レノショーカイシタオンナ] ト [アッ] テ [デ] ートシテ [コーチャノンドト] ヤ↑ (お前この前おれの紹介した女と会ってデートして紅茶飲んだのか?)

³² 注 28 に同じ。

³³ 川上泰 1956, 1995 「文頭のイントネーション」

文の構造との関係については、節の切れ目でポーズやピッチの上昇が起こることやフォーカスの位置によってピークが変わることもよく知られている。³⁴ 文末の助詞にはピッチを下降させるものがあるなど、文末のイントネーションを決定する。東京方言についていくつかの文末のイントネーションがあることも明らかにされている。³⁵ これからは各地方言の文末のイントネーションについて明らかにする必要がある。質問の意図はどこでも必ずしも上昇調になるとは限らない。

おわりに

九州方言の音声としては「三つ仮名」「ラ行音」「有声破裂音の前の促音」「内破音（入声音）」や語アクセントなどまだまだ取り上げるべきものも多いが、機会を改めて取り上げたい。

参考文献

- 秋山正次 1979 『肥後の方言』桜楓社
 有元光彦 2007 『九州西南部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』ひつじ書房
 伊波普猷 1974 『伊波普猷全集』第2巻, 平凡社
 岩本 実 1964 「日向の高千穂方言」(『宮崎大学学芸学部紀要』第17号)
 岩本 実 1983 「宮崎県の方言」(『講座方言学 九州地方の方言』国書刊行会)
 上野田鶴子 1989 「文法とイントネーション」(『日本語と日本語教育』第2巻, 明治書院)
 植村雄太郎 2001 『種子島方言辞典』武蔵野書院
 上村幸雄 1959 鹿児島県西之表市西之表 (『日本方言の記述的研究』明治書院)
 上野善道 1989 「音韻総覧」(『日本方言大辞典』小学館)
 NHK 1959-1972 『全国方言資料』カセット版 1981 (辺地・離島編Ⅲ)
 岡野信子 1983 「壱岐・対馬の方言」(『講座方言学 九州地方の方言』国書刊行会)
 岡野信子 1988 『福岡県ことば風土記』葦書房
 奥村三雄 1958 「方言の区画」(『国語・国文』27-3)
 上村孝二 1983 「九州方言概説」(『講座方言学 九州地方の方言』国書刊行会)
 川上 泰 1956 「文頭のイントネーション」『国語学』25集『日本語アクセント論集』(1995)再録
 岸江信介 2006 「四国諸方言における入りわたり鼻音について」(『音声研究』10-1)
 木部暢子 2000 『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版
 金田一春彦 1954 「音韻」(東条操編『日本方言学』吉川弘文館)
 金田一春彦 1964 「私の方言区画」(日本方言研究会編『日本の方言区画』東京堂)
 九州方言学会 1969 『九州方言の基礎的研究』風間書房
 九州方言研究会編 1996 『九州方言研究会報告書』九州方言研究会
 九州方言研究会編 2009 『これが九州方言の底力!』大修館書店
 久野 眞 2006 「高知方言の前鼻音」(『音声研究』10-1)
 久野マリ子他 1991 『四つ仮名の音声』, 1993 『目で見る四つ仮名』日本語音声研究成果報告書
 郡 史郎 1989 「強調とイントネーション」(『日本語と日本語教育』第2巻, 明治書院)
 郡 史郎 2002 「文末のイントネーション」(北原保雄監修『朝倉日本語講座3 音声・音韻』朝倉書店)
 国立国語研究所 1959 『日本方言の記述的研究』明治書院
 齋藤孝滋 2002 「方言の音声」(北原保雄監修『朝倉日本語講座10 方言』朝倉書店)
 崎村弘文 2006 『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』明治書院
 崎村弘文・木部暢子 2009 「沖縄, 中国へつながる九州方言」(九州方言研究会編『これが九州方言の底力!』大修館書店)

³⁴ 上野田鶴子 1989 「文法とイントネーション」 郡史郎 1989 「強調とイントネーション」

³⁵ 郡史郎 2003 「文末のイントネーション」

- 柴田 武 1991 『大分県史 方言篇』大分県総務部総務課編
柴田 武 2002 「九州・沖縄方言の2つの音声変化」(『国語学』53-1)
尚学図書編 1989 『日本方言大辞典』小学館
杉村孝夫 1996 「無型アクセント方言のイントネーション—宮崎県清武町方言の質問表現におけるイントネーション付与規則—」(『日本語研究諸領域の視点』明治書院)
瀬戸口修 1983 「種子島の方言」(『講座方言学 九州地方の方言』国書刊行会)
徳川宗賢篇 1979 『日本の方言地図』中公新書
日本音声学会 2001 『音声研究』第5巻第3号, 特集「九州諸方言の音声」
早田輝洋 1999 『音調のタイポロジー』(初出 1977 「日本語の音韻とリズム」(『伝統と現代』45)
日高貢一郎 1974 「宮崎県西臼杵方言における中舌母音の \ddot{e} ・ i について」(『日本方言研究会第19回研究発表会 発表原稿集』)
平山輝男他篇 1992-1994 『現代日本語方言大辞典』明治書院
吉岡泰夫・都染直也 1991 「無型アクセント地域における文型イントネーション」(『日本語音声』研究報告5)